

# 一九三三（昭和八）年の所感五点

1

一月下旬

相も変らず自己過大視病患者と自己過少視病患者の、現実より遊離せるわめきの中に、日本は昭和八年の春を迎へた。前者の代表であり、反動的国粹派の偶像たる軍部は、「非常時」といふめかくしを国民にさせて昭和八年度の予算の大半を恣にする事に成功した。しかも軍部は財源を「富裕階級へ増税」する事によつて得よと進言して相変らず反資本主義（？）的色彩をほのめかす事を忘れなかつたのだ。<sup>1</sup> 満洲に於ける不規則戦はいつ止むとも思はれぬ。否やまぬのではない、やめぬのだ。しかも他方、満州国の治安回復近きにある事を繰返し国民に念を押してゐる。国民大衆は「治安回復」への期待からして絶へざる「匪賊討伐」を非常時の当然現象と見做し、従つて、軍事費予算も之はちよつと大きすぎるとは思ひながらも黙認の形を取つてゐるのである。かくて日本の急速な軍国化といふ現象が起る（軍部の芝居は着々と進行してゐる）。

しからば何故に軍部に対する国民の好意が相当永続的なのか。之に對して答へる前に、所謂ファッショといふものに一言しよう。（僕は

之に對し唯一の答を持つ（。）それは、軍部が国家社会主義的<sup>2</sup>に見えるからだ。国家社会主義はジャーナリズムの所謂ファッショだ。）ファッショ——今日、これ程得態<sup>3</sup>の知れぬ存在はない。ラヂカルリンク<sup>4</sup>の見地からいへば、自派に属さ（ゞ）るものすべて之ファ（ツ）シヨだ。

ジャーナリズムは自由主義より少しも脱せるものにはこの名を進呈する。しかも進呈された者は揃ひも揃つて自己をファッショから區別すべく懸命になつてゐる。大衆はジャーナリズムを通して漠然たる反ファッショ的雰囲氣に接してゐる——かゝる状態にあつてファッショの本来とされてゐる軍部がなほ信をつないでゐるのは前述のファッショの本質の漠然たる事が大に重要な事だ。国民は金融資本を背景とせる政党政治に全然信を失つた。そしてたとへ確たる自覚はなくとも、兎に角現代の制度そのものに懷疑の眼を向けた。しかも資本主義を最も徹底的に究明せるマルキシズムの国家観は色々の意味で彼等に満足をあたへない。幼時から培はれた尊王思想は強く根を張つてゐる。そこで国家主義と社会主義（或は少くも反資本主義）とが暗々裡に結びつく。かくて漠然ながら国家社会主義的なものが最も国民の心をひくのは当然である。国家社会主義は勿論ジャーナリズムによればファッシヨだ。しかもファ（ツ）シヨ本体の曖昧性が、反ファッシヨ

的気分をそのまゝ、軍部の国家社会主義的傾向の上に向ける事を不可能ならしめる。かくて軍部は国民の支持を失はないのではなからうか。

たしかに軍部は今迄、政党政治の反対者たるに止まらず反資本主義的なそぶりを見せてゐた。(少くも政党政治の強固な反対者)しかも

——之が注意を要する事だ——あくまでそぶりに終始したので。

資本主義制度の改廃どころではない。大財閥への干渉すら敢てしないではないか。満州国成立当初には之を完全な統制経済下に置き内地資本家の盲目的な投資を絶対に排する様な事がいはれてゐた。その氣配を感じてか、一時満州への投資は全く沙汰止みとなつた。と見ると出先軍部は狼敗<sup>(マ)</sup>して、「決して資本家の投資を喜ばざるが如き事なし、むしろ大に開發されたし」と数度の声明をなした。又昭和八年度の予算會議の際も荒木陸相は富裕階級への増税を主張しながら、高橋蔵相が「産業を萎縮せしめる」としてそれに反対するや、それより国民の負担に対する何等の顧慮なしに要求額を貫徹させてしまつた<sup>(三)</sup>。

軍部が今後その自己過大視病をますますつのらせて、全日本をあげて軍国化たらしめんとするならば、僕は断言する、日本の行衛には破滅のみが横はつてゐると。(日本人にして真に日本を愛さぬものは居ない。)僕は国防の必要を痛感する。しかし、国民生活を無視した軍備が果して真の国防だらうか。国民大衆を飢死状態に置いておき、国の周囲にいたづらに高き垣をきづき、さあどこからでもこいと力んで見たとてどうなるのだ。

これらの矛盾はすべて国内よりも国外に重点を置く所に生れる。対

外的挙国一致の必要からして、日本の現在の社会機構を黙認せざるを得なくなつてくるのだ。(矛盾を根本に求めよ。日本に残された道はたゞ一つだ。敢然として資本主義制度を全廢し、陛下の赤子をして飢えしめざる社会主義日本の建設へ！)

かくて後、国民はまことの祖国愛に目覚め、対外問題に対する純粹の挙国一致も生れ出るであらう。

これが成就には恐らく軍部の力を要するであらう。軍部のたどる途はこれ以外には有り得ない。しかも現在の軍部はこの一本道に行きあたる事も出来ず、ひたすら谷底へ通じてゐる所の道ならぬ道を猛進してゐる。一体従來の国家社会主義運動は、元來が満州事變を背景として、これまで思想界を支配してゐたインターナショナルに反撥して生じたものであるから、現今の非常時日本——就中対外的非常時の続く間はその国家主義を絶えず強調する手前、その反資本主義的態度を実行に移す暇なく従つて國際的社会主義者から、大衆をその外見的社会主義を以て偽瞞し、究極はブルジョワジの最も完全なる防備をなしつ、あると罵倒される。そこに、一般ファシズムの階級的良心が問題になるのだ。(ファッショ団体は、元來の国粹主義より生れ出た盲目反動的シヨウヴィニストと、従來の第二、又は第三インターナショナルを背景とせる無産政党より抜け出た国家社会主義団体とはその動機に於て本質的に異なるものがある筈だ。それで私は、最近迄、世界革命によつて劃一的にもたらされる國際社会主義は、それが現実からまがふ方なき飛躍であり空想である以上、結局切実なる大衆の要求に

合致せずかへって階級的正義に反するとの見地からして国家社会主義に対して多大の同情を有してゐた。しかし国家の名を公然と冠する事は如何なる結果を招来したか。……国家の名に於て行はるゝ限り如何なる行動も是認せざるを得なくなつて来てゐるのではないか。少くも日本が国際關係に於て微妙な位置に立つ限り、前述した通り、対外的緊張状態は、彼等国家社会主義者を一般シヨウヰキニズムの陣営にかり立てるものではないか。かくて彼等は口々に社会主義日本の建設を叫ぶに止まつて具体的に何一つとして実行出来なくなる。私はまざまざとこの実例をみせつけられた。赤松克麿氏を中心とする国家社会党がそれだ。<sup>4</sup>最近この党は大日本生産党、等々純粹の反動団体と大右翼結成の名の下に合併せんとさへしてゐる。共產党から社会民衆党への間（即ち第三から第二への転向を経て来たにせよ、ともかく）あれ程長くインターナショナル、ソシアリズムの陣営でもまれて来た赤松氏が、ナショナルソシアリズムへと急旋回をなすかなさぬに早くもそのナショナルリズムのためにソシアリズムそれ自身をかなぐりすてて、純粹日本主義に屈伏しなければならなかつた事は結局に於て一時非常なる可能性を□示した国家主義と社会主義との結合は少くも現今の状況に於てはいさゝかの蓋然性も持ち得ないといふ事を最も明白に暴露せるものでなくて何だらう。〈苟もソシアリズムを採る限り、あくまでもそれはインターナショナルを前提としなければならぬ。〉そこで我々は知るのだ。たとへ社会主義運動が成功の結果に於てナショナルの方向をとる事とならうとも、少くも闘争の過程に於ては、ソシアリズム

はあくまでインターナショナルの大旗をかざさなければならぬ。社会主義が、実現への徒らなる近道を夢みて、ナショナルリズムと結合を敢てすれば、その後に来るものは、〈その日から、社会主義としての本質〉社会主義が国家主義に他愛もなく併呑されて行く悲惨な場面の展開に過ぎない。（完）

2

二月二十二日

予期せる事が起つた。尾崎峯堂の帰朝と共に、上陸反対の決議文が差だされ、国賊！ 非国民！の聲がわき起り翁を襲はんとしたものすらあつた。<sup>5</sup>

狂熱的右翼の驚くべき思ひ上りを我々は又もやこゝに見せつけられたのだ。何をか国賊といふ。何をか非国民といふ。尾崎翁が日本の国体を否認したとでもいふのか。

彼等はいふ。国際協調主義といふ日本の国策に反する意見を持ち、日本の大道にはづれた説を吐露するが故なりと。国策に反するものが非国民ならば、その時々々の国策をたゞ盲目的に支持するものが眞の国民であり、国家百年の計のために、当時の国策を批判し之を覚醒させんとするものは皆国賊なる事になる。日本の大道大道といふ。〈が大きな長い目から見たがこれこそ眞の大道なりといふ客観的〉或はそれは現在の状況のみから見れば「大道」の如くに見えるかもしれぬ。が

果して真の国家の永遠の大道なるか否かは軽々に判断さるべきものではない。一時的の民族的興奮を伴った主観に、何等の深い考察なく客観的価値を附与して省みぬ所に我国の右翼急進派の恐るべきドグマが存する。

「英国に於ては、世界大戦にすら非戦論を唱へた人（が）居る、といふ事をよくいふが、それは、その非戦論によつてどれだけ英国が迷惑したかを知らないのだ」とある老論客が言った。之は知らずして（時代追隨）我国国粹主義者の特性を暴露してゐるものだ。「その時の迷惑」を非常に拡大する事により、それが長い歴史的発展から見て将来の迷惑か否かといふより根源的な問題を覆ひかくしてしまふのだ。現今の世界の思想、経済、百般の混乱が一に世界大戦に胚胎してゐるといふ事が明白な今日、英国人の誰が、当時の非戦論を以て英国永遠の障害をなしたと考へるものがあらう。否、誰か世界大戦の絶対的善なる事を信じよう。

（「されば」といって私は現代日本に於て、聯盟脱退不可、鎖国主義不可といつて）私はこゝで、聯盟脱退の可否等を論じようとするものではない。たゞ現今日本にあまりにも封建的島国的ドグマの横行するを見て憂へずには居られないのだ。

真剣な論議、隔意なき批判のな（なくして）進歩は絶対に望めない。こゝき所、そこにはたゞ停滞と暗黒があるのみだ。政治家にしても非常時（と）さはいで、時勢に迎合して強がりをついふのなら誰にも出来る。非常時なればこそ、百年の計をあやまらざる様、いくつつかの方法を最

も慎重に考慮した上で自己の所信をあくまで遂行する真の力の政治家こそ現代日本に最も要求されてゐる所のものである。（終）

3

神田の防空予行演習で、防護団員が点燈した円タクを引止めて暴行を振つた。しかも警衛課長の言によれば、予行演習の際は自動車は点燈する事になつてゐたのだ。<sup>6</sup>

私はこの記事を読んで、すぐにかの関東大震災の時の事を想起した。あの混乱状態に於て秩序の維持にあつた自警団が如何なる行動を取つたかは、まだ人の記憶に新たな所であらう。如何に多くの無辜の鮮人が、又時には内地人すらも狂的に興奮した自警団の犠牲に斃れた事だらう。しかもその行動の唯一の根拠は、極度に誇張された流言に過ぎなかつた。

日本人の興奮性は国民性の一つといつてよい。それはある場合には実に美しい形となつて発露されて、日本人のうるはしい特性を形づくるが、ある場合には、しかも残念な事に多くの場合には、戦慄すべき野蛮性・狂暴性として一時に示現される。日露戦後の焼打や、米騒動、大震災等の時は、それが集団的であらはれた著しい例である。

殊に近頃はこの性質が天下横溢のいでである。満州事変によつて国民が民族性に目覚めたはよいが、忽ち葉が利き過ぎて、国民的自覚は狂熱的愛国心にまで高められて五・一五の不祥事を惹起した。非常時

なればこそ一層の冷静・沈着を要するといふ時に、異常の興奮と神経過敏が全日本を支配し、それが外には、かの一徹外交となり、内には今や学園の圧迫となつて具体化してゐる。

防空の演習の、そのまた予行演習ですら、今回の暴行事件が起つた。この調子では、一旦緩急あつ〔以下欠〕

47

それはまがひもなく、私の過去十数年の生涯中曾てなかつた、又これから先の私の生活中にも恐らくあるまいと思はれる程の激動を私の心に起した出来事である。

二十といへば通例人が人間として精神的に肉体的に一先づ完成して幼年—少年を通じての依存生活を清算するに至るべき過渡をなす時である。この人生に於て過渡としての段階に相当する時に恰もこの大きな事件を体験した事は私をして、そこに云ひ知れぬ或る意義深きものを感じしめるのだ。

桜も漸く、固く結ばれた唇を開かうとしてゐる四月十日だった。私はホッケーの合宿があるため一日から寮にとまつてゐた。休暇中の寮——それは確かに「廢墟」といふ字を言葉の最も忠実なる意味に於て具体化したものと思はれない。賑やかなさんざめき、寮歌のひびきと下駄の音がからみ合ひながらしかも渾然調和して耳にひびいて来るあの平生の寮から、今やあらゆる「動」の姿は消えてた。長細い朽ちかけた積木細工が、漸く青みが、つた大地に死の沈黙を守つてゐる。

その中に私達十一人の殆んど唯一の「生」があるのだ。これで私等が無聊に苦しまず、刺戟を求めずに居られたらそれこそ不思議といふものだ。練習が終つてからは、始めの二三日こそ、部屋で友同志興じ合つて躍動する生の力のはけ口をお互の間に見出してゐたが、やがてそれは外の刺戟を求めての爆発とならなければやまなかつた。私達は手あたり次第映画を見た。あてもなく無暗と歩き廻つた。誰もその様子をを送る事の如何に価値のない恥づべき生活であるかを痛切に意識してゐた。が「廢墟」の中でまとまつた読書にいそしむなどといふ事は問題にならなかつた。畢竟さういふ生活は我々にとつては、環境のもたらず必然だつたに違ひない。だから八日頃だつたか、いつもの散歩の途上、棚澤の前にかゝつてゐる「唯物論講演会」といふ広告が刺戟に飢えてゐる私の眼を異常に鋭く射たのは当然だつた。すぐさま私の眼は紙の上をすべつた。講演者は？——長谷川如是閑、服部総之、岡邦雄……よしつ、時は？——四月十日午後六時より、場所は？——仏教青年会館！ 近い！ これだけをすばやく見て取つた時に私の心は既に之に行くべく定まつてゐた。……

四月十日になつた。外のものは大部分邦楽座へ「巴里—伯林」を見に行く事になつた。私は心大に動いた。友達は無意識に一緒に来いとしきに誘つた。が、今迄、意識しつゝも、学的に無意義な生活に甘んじてゐたといふ良心的矛盾が、たとへ一端なりとも、この会を聴く事によつて止揚せられるといふ感が次第に、何よりも強くその時の私を支配するに至つた。かくて遂に私は友と別行動をとる事に最後の決定を

したので。この二つの道の中、他をとったとしたなら私はこゝに今、筆をとる必要もなかったであらう。之をしも運命といふか。しかしすべては、運命として片付けてしまふべくあまりに複雑な感慨を私の心に強ひるのだ。

夕もやが漸くしのびよって来る頃、私は仏教青年会館の前に立つてゐる自分を見出した。私は入口の両側に二人の警官を見た。がそれは私の心に何等の動揺を与へなかつた。何か講演がこゝである時に偶然通り合せて既に同じ光景に接した事が一度ならずあったから。：私は躊躇せず進んで警官の間に立った。二人は両側から私のポケットのあたりを手なでまはした。流石にいゝ、気持はしなかつた。「よし」といふ声に、救はれた様に、私の身体は「こちらへ」といふ左前方からの女の声に吸ひ付けられて行つた。事実、この時には既に無意識的な、恐怖心と羞恥心との交錯が完全に私を支配してゐたので、私の周囲のものとは、漠然と意識されるだけだつた。誰が、何人、そこにゐるのかも分らず、なんでも早くこの空気を脱して中に入りたい心のはやり立つた。二十錢を置いて、さし出された手から入場券をつかむや隔幕をくぐつてホツとした。ベンチがずっと前方へ続いてゐて、前の方の三四列は既に占められてゐた。案外来て居ないなど思ひながら左側のベンチに坐つた。あたりの人を見廻して見ると大学生が多かつた。一高のものは外に見当らなかつた。だがその中にもベンチの空席は見る／＼塞がって行つた。私は顔を動かすのを止めて手に握つてゐたプログラムに眼を向けた。如是閑の挨拶に始まつて、「自然科学と唯物

論」とか「初期資本主義の研究」とか、目をひいた。中にも貴司山治の「マルクス伝」といふ題に最も通俗的な好奇心を感じた。かう見ると「唯物論研究会」といつてもそれは殆んど「史的唯物論」のそれだなど漠然と感じられ又それが当然の様に思はれた。すると又私は頭をあげて周囲の聴衆に視線を復した。この人達も程度の差こそあれ、皆リンクスゲナイクト(8)なんだらうといふ目で一人／＼の風采態度を見る事にすぐつた様な興味を覚えたのだ。さうしてその興味はまもなく、彼等の会話から左翼的言辞の断片なりとも聞き取らうとの例の分のわからない欲望にまで高められた。だが私の視覚聴覚の及ぶ範囲ではまるでその望は裏切られた。すると私の心には失望が感じられると同時に何かしらホツとした様な意識が心の一隅に頑強にその存在を主張し始めた。私は私の試みにひそかな悔みを覚えながらふと後をむいた途端、私の視線は斜右後の方に頬杖ついてゐる男のそれとバッタリぶつかつた。

広い光つた額と射抜く様な眼に、瞬間私は佐々木主事(9)を見た。反射的に目をそらせて頭を反したが、心は異常に乱れてゐた。背中にやけつく様な男の視線を感じながら私は考をまとめ様と焦つた。「佐々木主事がこんな所に！」：「まさか……でも左翼残党狩りのために来ないとは限らない……なに、主事なら主事でいゝさ。俺は別にムムバー(10)でも何でもないんだから……」〔 〕

かうして私は確信と不安を心の中に闘はしてゐたが、どうしても主事ではない様な気がしてならない。

恰度小便を催したので私は席を出て何かしら面はゆさを感じつゝ、列の間を通過して講壇わきの便所へ入り、出て来て席へ帰りながらその男を見つつけ出すと、彼は今度は講壇の方へ目を向けてゐた。それで私は少々落着いて段々近づきながらよくその顔を見てみると驚くべき程の佐々木主事との類似の中に、侵しがたい相異のひそんでゐるのが認められた。私が自分の席の列に達するやその男は又もや鋭い視線を私にそゞぎかけたが私はもう驚かなかつた。たゞ何をこんなにジロ／＼見やがるんだらうと半ば気味悪く思ひ半ば癩に障るだけだつた。……………

間もなく開始のベルがけた、ましく鳴り渡つた。後を見渡すと（あの男の目はまだ「だに」の様に私に吸ひ付いてゐる！）会場は蒸せ返る様な大入だつた。それより驚いた事には何時の間にか会場のごり及び席列の間々に一間位置きに正服のあごひもがづらりと立ってゐる事だつた。

たかゞ唯物論講演会にこんな大げさな警戒！ 非常時日本とは非常識日本の謂なのだらうか。私にはたゞ本富士署の神経過敏が滑稽なものとしか映じなかつた。

と拍手がどつと起つた。司会者に紹介されて長谷川さんが演壇に進み出た。久しぶりの懐しさと、ある誇らしさを以て私はデットあの特長的な口元に目を注いだ。……………

「今晚は唯物論研究会の第二回公開講演<sup>1)</sup>でありまして、それに先立ちまして私から簡単に唯物論研究会の目的とか会員数、活動状態等を御報告しようと思存します。……………」<sup>1)</sup>

およそ情熱とか興奮とか名のつくものは前世に忘れて来たかのような例の態度と音調ではあつたが、彼の一語々々には動かし難い確信が脈々と波うつてゐた。かうして彼は、唯物論研究会は純然たる學術機關であつて何等実践的意義を持たぬものである事（こゝで彼は一般概念に従へば純學術的なるべき所謂精神文化が今日では却つて政治的意味をもつてゐるといふ事をチョツピリほめかして、争はれぬ如是閑根性（？）を示す）<sup>2)</sup> 并にその会の哲学、自然科学、経済学等の部門及びその各部門に於ける現下の中心問題を挙げ、一転して、この会員は決して一般的のものでなく、特殊な専門研究家に限定され従つてその發展性に非常な限度を見越さなければならぬにも拘らず創会以来会員増加率は驚くべき程で現在は実に百を以て数ふるに至つた旨を述べ、

「これに力を得て我々は益々奮起し、唯物論によつて科学の正しい立場を……………」<sup>3)</sup> といひかけた時、正にこの時！講壇の左に、今迄「何をうそぶく」といつた顔で笑つて聞いてゐた署長の帯剣がガチャリと響くと同時に「中止！」とわれる様な声が聴衆の度胆を抜いた。如是閑はあつげにとられて署長の方に眼をやつたが、すぐそのまゝ、聴衆のあてつける様なすさまじい拍手に送られて引込んだ。すると署長は何思つたか悠然と講壇に歩を運び聴衆に向つて開口一番、

「本集会の解散を命ず！」

之には私は呆然たるより外なかつた。第一私がこゝへ来る動機そのものが必然的なものではなかつたし、従つて無産党の演説会を聞きに行く様な心構へはまるで持ち合して居なかつた。又入口の検査や中の警

戒の嚴重さ及プログラムの内容など私には多少意外でありまた稍々不安な気もしたが、精々「之は中止があるな」と思った位で、講演に入らぬ中に、中止、つゞいて解散になるなどといふ事は僕の想像から最も遠いものであった。……………

聴衆は仕方なく腰をあげ始めた。一時、聴衆をさっと襲った不穏と憤懣の色が、狂的にひきしまつた全警官の顔面筋肉に押しつぶされて、重苦しい雰囲気がかもし出された。私もこの空気に向つて、二十銭只取られ、「巴里―伯林」も見損つたといふ可愛い、不満を人並に吐き出しながら、皆についてゾロ／＼出口の方へ歩み出た。すると出口の所が妙にザハついてゐるのが目についた。警官が五六人固まつてゐる。

と、私はギョツとして立竦んだ、…その警官だちに何やら指図してゐる者こそ誰あらう、あの「第二世佐々木主事」その人なのだ！ 彼奴は警察のものでした！ だが私に驚く暇も許さず、次の呪はれたる瞬間、男の例の射抜く様な凝視はピタリと私の上に坐つてゐた。

「おい！ 一高！ ちよつとこ、へ来い」聞えるか聞えぬかの声で彼は一つ向ふの列から呼びかけた。私は信じ切れなかつた。で私はなほその男をチット見ながら二三歩進んだ。

「おい！ チョット来るんだ」

今度ははつきりした声で私を招いた。私に用がある事はもう疑ひなかつた。私は黙つて群列を離れて腰掛の上を飛び越しながら側へ行つた。そこには大学生が五六名と府高の生徒が一人、警官だちに取巻かれてゐた。

「何ですか……」私の不審と憤慨をつきませた様な間に、彼は答へ様とせせず巡査に向つて早口に言った。

「い、か。こいつらを運ぶんだ。一人に一人づつ……なあに、歩いて行くんだ。裏を通つてな……」

一番手近にゐた巡査がムツと私の手をマント越しにつかんだ。私はそ、ま、彼と並んで仏教会館の楽屋の方から表へ出た。府高の生徒が矢張り手を取られた儘私の後に随つた。私はもう恐ろしい程冷静になつてゐた。人通りの少い路を／＼と通つて行つたので、通りながら三四の人が不思議さうに私達の方を見送つてゐたに過ぎなかつた。今晩帰つてから室の連中へのい、退窟しの話題が出来るぞ………そんな事まで考へて思はずほ、えむ私だつた。あんまり巡査がしつかり腕をにぎつてゐるので私は苦笑しながら言った。

「放したつて大丈夫ですよ。逃げるなんて事はしませんから……」だが不用意にもれた私の言葉は又私を憂うつの谷底へころげ落した。

……嘘をつけ。逃げられるなら逃げたくて仕方がないんだ！ そりあ俺には一点やましい所がない。だから警察へ行つたつて恐れる事はない堂々と立場を述べればい、筈なのだ。だがそんな事は最も俺の現実に遠い事だ。書斎の空想だ！ 言葉の綾だ！ さうだ！ 警察なんて真平御免だ。警察なんて犯人「養成」場じゃないか。そこには奸智に満ちた「取調」、目をそむける様な「拷問」、それから肺を食ふ「箱」が貪婪な眼で獲物を待つてゐる………〔。〕

だがさうして私が限らない焦燥の沼に足を踏み入れてゐる中に、機



械の様に沈黙で忠実な警官は依然固く私の腕を取ったまゝ、片手で本富士署のドアを排した。

暗い所を通つて来た眼にさへも、鈍く陰気な光をあげて、づらりと机をならべて執務してゐた人の頭が一せいにチョツと上つたがすぐまたもとの位置に返つた。あゝ、この光景はまだ私の記憶の中に、新鮮さを失つてゐなかつた。亀田・柴田・私それに風点委員の阿部と四人で自動車をこの署の前に横づけにしたのは、ついこの記念祭のイーヴだった。あの時は土方などといふ模範寮生や、典型的リベラリストの岡本などが続々豚箱へ行くので憤慨おく能はず、又一高生が並々ならぬ御厄介になる本富士署への好奇心も手伝つて、頼まれもしないのに飛び出して差人に入ったのだ。何でもないものが警察の門をくぐる時の妙に強い自己意識を私も感じながら、執務してゐる人のそばを見下す様にして通つて行つたのを覚えてゐる。所がそれから僅か二ヶ月後の今、頼みもしないのに、一呑真平御免なのに、警察のドアを排する堂々たる理由が我が身に附与され様とは、……………所謂皮肉とは之をいふのかもしれないぬ。だがこの時の私の心は、皮肉などといふ生易しい観念に対してはいさゝかの包容力も無かつたのである。

事務所をつゝきつて、無気味な留置所の右手の階段を登つて、右の廊下をつゝきつた所が、あの印象的な特高部屋だ。その入口で巡査は帰つて行つた。衝立の後から「入れ」と声がかかる。帽子とマントを取つて衝立の左へ出た。パツと明るい電燈と、ゴタゴタそこここにかたまつて大声に話しあふ人、それに一目みて如何にも雑然たる室の配

置が、忽ち私の感覚をにぶくしてしまつた。どこともない一点を見ながらポツと立つてゐると、一番近くに坐つてゐる男が

「まあ之へかけろ」

と前の椅子を示した。私は軽く頭をさげてそれに腰かけた。府高の生徒はついたてのわきに坐つた。私は半分本心から、半分直観的な故意から、全く沈み切つた顔をして、眼を伏せてゐた。右の方から、

「お前の近眼は強さうだな……え……」

といふ声に頭を上げると、一度歯をあてた大豆の様な顔の男が何かの紙を私の前の机に置いた。この前来た時確か見た顔だつた。私は「いゝ、え」とかすかに答へて紙に目をやつた。

「それに書き込むんだ。万年筆でいゝから……本当の事を書かなければいゝぞ！」

さういひすて、彼は私のそばをはなれた。私は一先づ慌たゞしく紙の上に眼を走らせた。姓名、生年月日、本籍、現住所、父母兄弟等から、交友、愛読書関係、趣味・嗜好それから最後の大きな空席は「行動大要」との見出しだつた。行動……って、何も実践をやつた訳じゃない……私の不服は又グット頭をもたげた。左に坐つてゐる人に、恐るゝ尋ねた。

「チョットこの行動といふのは……〔〕彼は書きものからチョット眼をはずして紙を見ると、

「あゝ、そこは書かなくてよし」といつてすぐ又手を動かし始めた。と、この時衝立の方で声が出た。

「何だ。貴様は一高じゃないのか」

「え、」

「どこの学校だ」

「府高です」チョツと問があつて、

「貴様何しにあんな所へ来た！」

「はい……たゞ……ちよつと……」

「何がチョツトだつ！」ピシアリと音がした。私は驚いて筆を置いて後を見た。府高生は手で顔を守りながらしきりに謝つてゐる。

「貴様みたいな青二才が唯物論なんか研究して何するんだ！」

「はい」

「貴様の親爺は何してるんだ」

「軍人です」

「軍人!? お父さんが軍人になつて国家のために奮闘してゐるのに息子が唯物論を研究するたあ何だ！」ピシヤリ

この時始めてかすかながら心からの可笑しさが私を訪れた。それを顔にあらはすまいと私は又ペンを取つて紙に向つた。

「お前の家へこの事を知らせてやらうか……」

「い、え……どうぞそれは……」

「お父さんに知らせたら、どうなる位貴様でも分るだらう」

「はい」

「今度あんな会へ来たら十日でも二十日でも放りこんで置くぞ、いか。すこしはお父さんに見ならへ！」

「はい……」

「分ったか」

「分りました」

「ぢや今度だけゆるしてやる。帰れ！」

「有難う御座います」

「寄道しないで真直帰るんだぞ！」

「はい。どうもすみませんでした……」

何べんもの礼の後、府高生の靴音が廊下を遠ざかつて行つた。……

私は「帰れ」を聞いた時に「占めた」と思った。二つ三つのピンタは覚悟しなければならぬが兎に角あれだけで帰してくれるんなら有難い。今度は私の番だ……と。だが不幸にも次の瞬間もう私は恐ろしい不安につゝまれてゐた。……なら何のために私にはこんなものを書かせるんだ！ さうだ。さっきの口ぶりではあの府高生は一高生と間違へて検束を食つたものらしい。して見ると私は……。考へれば考へる程心は重くなつて行き、書込みの方はさつぱり進まない。私は次々の項目について左右の人に質問をつゞけた。たしかにそれは純真にみせ様とする本能的努力と、あくまで大事を取らうとの慎重さのみじめなあらはれだつた。

「この現住所といふのは寮ですか、家ですか。僕は今ホツケーの合宿中で寮に臨時に居るんですが……」

「この交友といふのはどの程度の……」

「趣味と嗜好の嗜好といふのは食物ですか……」

始めの一二の問ひは比較的親切に答へられたが、遂に相手のかんしゃくを破裂させた。破れ鐘の様な声が私の耳もとにひびいた。

「何だ貴様一々、子供じゃあるまいし、そんな事が分らんのか!!!」

私は泣き出しさうな顔で口ごもりながら何べんも「すみません」を繰返した。(中断)

5

警保局立案の堂々三部に汎る思想対策案<sup>(17)</sup>を期待を以て読んだが、それが従来幾度となく唱へられた事の無意味な繰返し以上に一步も出でぬのを知って大に失望した。

第一「対策の目標」には「今日の社会組織の不合理な点を究明是正せざる限り対策は無意味だと動もすればいはれるが、之では畢竟不穩思想の主張を容れて以て対策成れりといふ事になる。やはり不穩思想が国体と根本的に容れぬ事を闡明する事が要点だ」との事である。そんなら作製者達は社会組織の不合理な点の存在を否認してゐるのかといふとさうでもないらしい。次の予防策の所に「不穩思想を浸潤し易からしむる諸般の社会的欠陥：云々の検討是正に勉むる事」が一枚加はつてゐる。つまり社会の不合理は直さにやならんがそれを対策の前提とするのはいやだと仰言る。自分の体の創口を直す事を後廻しにして丹毒の予防を計らうとの御苦心は御同情の外はないが結果は保証出来ぬ。

お上の人々よ。たまには後を振返つて御覽、思想問題が喧ましく言はれる様になつてから八九年は経過してゐる。その間、建国精神の作興、教育制度の改善、赤化者嚴刑等全く同じ題目が幾度立案せられ決議せられ、そして実施せられて来た事だらう。しかも赤い手は益々のびて教員・軍隊遂には司法官をも犯すに至つたではないか。しかも驚くべき事に、満州事変によつて起された国民的、民族的興奮といふ<sup>(18)</sup>火の粉をくぐつて来てゐるのだ。これでもまだ従来の思想問題対策の失敗を認識出来ずして全く同じ科白をシャア／＼と述べたてる警保局の御方々のあつかましさには呆れたのを通り越して敬意を払ひたくなくなる。

建国精神の作興、国体の精華なる所以の究明もとより結構である。否、これは確に教育の基礎・根本であらねばならない。だが、之は基礎である以上みだりに之を手段として用ひる事は絶対に危険である。

注

(1) 注(3)参照。

(2) radical link. ドイツ語として破格のように思われるが、急進左翼の、という意味であらう。

(3) 五・一五事件の後をうけて一九三二年五月二六日齋藤実内閣(蔵相高橋是清、陸相荒木貞夫)が成立、同年二月二四日第六四通常議會招集、翌一九三三年一月二二日高橋蔵相が衆議院で財政演説を行ない、一月二六日衆議院予算總會開始、二月三日大蔵省が衆議院予算委員に昭和八年度歳出予算使途別表を提示、軍事費が三六パーセントを占めた。審議は低調で二月一〇日原案を可決、二月一四日衆議院本會議で原案無修正可決。三月二六日閉会した。丸

山の云う「昭和八年度の予算会議」が何をさすかははっきりしない。

(4) 赤松克麿(一八九四—一九五五)は、東京帝国大学在学中の一九一八年二月、学生団体新人会の結成に加わり、一九三二年七月の共産党創立とともに入党、その後日本労働総同盟の幹部となったが、「現実主義」に移行し、一九二六年二月五日に結成された社会民主主義政社市民衆党に加わって書記長となった。満洲事変以後の社会全体の右傾化の傾向の中で赤松は、党の国家主義への転進を図って失敗し、一九三二年四月一日脱党、同様に国家社会主義を指向する労働組合グループとの合意を企ててならず、五月二九日日本国家社会党を組織した。しかしこの党の中でも日本主義の方向を進めようとする赤松のグループと反対派の対立は深刻化し、一九三三年一月二二日の第二回党全国大会はかろうじて分裂を回避したが、対立はおさまらず、七月二日には、赤松以下日本主義派中央委員が連袂離党した。また日本国家社会党は、一九三二年六月頃から大日本生産党、神武会、勳皇維新同盟などいわゆる愛国団体との共同闘争を進めていた(内務省警保局編『社会運動の状況 昭和七年』『社会運動の状況 昭和八年』(三一書房復刻版、一九七一年、一九七二年)、木下半治『日本ファシズム史』中巻(岩崎書店、一九五一年)、赤松克麿『日本社会運動史』(岩波書店、一九五二年)、塩田庄兵衛『日本社会運動人名辞典』(青木書店、一九七九年)などによる)。

(5) 外遊していた尾崎聖堂は、二月二日朝、欧州航路客船で神戸港に帰著して支持者の出迎えを受けたが、続いて兵庫県特高課員に伴われた日本急進同盟本部員が、尾崎の上陸反対決議案を手渡した。さらに、水上警察署長が先導してタラップを降りたところ「国賊」どの面さげて帰って来た」と叫ぶ二人の男が飛びかかったが逮捕され、尾崎は警察の自動車で物々しい警戒の中に埠頭を去った。

(6) 一九三三(昭和八)年二月一六日、陸軍省は、八月上旬に「帝都防衛」を中心とし、関東地方全体にわたる、陸海軍・警察・消防さらに防護団はじめ民間団体を動員して、対空戦から燈火管制までにわたる大防空演習を行うことを発表した。それをうけて三月二〇日午後七時過ぎに陸軍東京警備司令部から警察庁へ、さらに各警察署・交番へと空襲を報じる防空演習通信予行演

習が行なわれた。丸山が記す事件はこのおりの燈火管制に関するものであろう。防護団は、一九三二(昭和六)年満洲事変の頃から軍部の指導のもとに防空活動の民間の担い手として各市町村に組織されたが、法令上の根拠がなく、一九三九年、法律により防護団と消防組とが統合された警防団が組織された。防火演習や防護団は現実の空襲に対しては無力であったが、国民の戦時体制への組織のためには大きな役割を果たした。防護団員の暴行から関東大震災時の自警団の暴行を想起するのは、丸山の感覚の鋭さを示すといえよう。「朝日新聞」一九三三年二月一七日、三月二二日記事および『国史大辞典』「防空演習」「警防団」の項を参照した。

(7) この所感は逮捕直後までの記述で終っているが、松沢弘陽・植手通有編『丸山眞男回顧談』(上)(岩波書店、二〇〇六年)四八—五三頁、六四—七六頁では、取調の詳細から釈放後の学校当局・特高・憲兵による監視にわたって語っている。

(8) linkenist、ドイツ語形容詞、左翼的。

(9) 一高の生徒主事、佐々木喜一。

(10) 共産青年同盟員あるいは共産党員の意。

(11) 唯物論研究会は、一九三二(昭和七)年一〇月二三日、戸坂潤・三枝博音・岡邦雄らによって結成され、長谷川如是閑が創立總會の議長をつとめるなど会長的な存在であった。山領健二編『人物書誌大系6長谷川如是閑』(日外アソシエーツ、一九八四年)参照。

(12) 府立高等学校。東京府立の高等学校として一九二九年開学。

(13) 亀田は亀田喜美治、終生、丸山の親友。

(14) 柴田は丸山に先立って本富士署に逮捕され、留置場の丸山と同じ房にいたようである。前掲(注7)『丸山眞男回顧談』(上)五〇頁参照。

(15) 一高寄宿寮の自治制を担う寮委員会を構成する委員の一つ風紀点検委員の略。

(16) 衆察五番の丸山と同じ文乙のクラスから宇野脩平のほか、土方、岡本、石井の三人が逮捕された。その事情について前掲(注7)『丸山眞男回顧談』(上)五〇—五一、五五—五六頁を参照。

(17) 「警保局立案の堂々三部に汎る思想対策案」といわれるものの成立の背景について年表的に摘記する。

一九三三(昭和八)年四月六日、第六四議會で可決された「思想対策決議案」にもとづいて、内務・司法・文部各省の次官・局長を中心に委員会を設ける議が起り、八日にはそれを具体化するために内務省警保局が動き出した。

四月二一日、閣議で、首相官邸に、内務・司法・文部三省の次官・局長を中心とする思想対策協議委員会を設けることを決定。

四月一五日、同委員会第一回会合。

四月二八日、第二回会合。思想の取締とともに「善導」をはかる基本方針を決定。

七月一七日、思想問題対策の内務省原案決定。

九月一五日、閣議で、委員会の成案を了承。

「警保局立案の……思想対策案」が、この立法過程のどこに関連するかは明らかに出来なかった。したがってこの案の確定の時期も、またこの所感執筆の時期も一九三三年四月中旬以降という以上に特定出来ない(掛川トミ子編『現代史資料42思想統制』(みすず書房、一九七六年、xxi—xxiv、九八一—一〇四頁、内川芳美編『現代史資料40マスメディア統制』(みすず書房、一九七三年、ii—iii頁、二五六—二五七頁)および『朝日新聞』縮刷版による)。